

今年も、いつの間にか師走に入っていた。残り一か月もない。これから、コロナ禍とはいえ例年のように「ジングルベル」に追いまくられて、クリスマス、大晦日、除夜の鐘、ゆく年くる年と、次から次へと慌ただしく過ぎていくのだろうか。

ところで、日本には四季がある。四つの季節のなかで、どれが一番好きだろうか。それぞれに良さがあり、順番をつけるのは非常にむずかしい。

春には、出会いがある。本校生との出会いも春だった。春には、何か人をうきうきさせる不思議な力がある。今でも、あの春の頃の新鮮な、ほどよい緊張感に包まれたすがすがしさが残っているだろうか。

夏になると、急に開放的になる。海に山に、車でひよいひよい出かけたくなる。しかし実際には、6月から7月の下旬までは、じめじめした梅雨が続き、あまりぱっとしない。梅雨が明けたかと思うと、福島の夏はうだるような暑さで嫌になってしまう。夏がいいなあと思うのは、海に行ったときや高原のさわやかな空気にふれたときである。長野県や群馬県に行くと、福島との違いを思い知らされる。軽井沢などまさしく“避暑”にぴったりである。また、残暑の9月の真っ赤な夕焼けが好きである。日中は、真夏のように暑いのだが、夕方になると涼しくなる。夏の終わりのひとときが何とも言えない。Tシャツに短パンで、スイカにかぶりついていればもう言うことはない。

そして、秋。秋には、様々な顔がある。10月のさわやかな青空。何か哀愁を漂わせる秋。冬の足音が聞こえる秋。秋は、物思いにふけるには最高の季節である。何かさびしくなるのだが、とても好きである。ふと、遠くの景色を見つめて考えごとをしたくなるのも秋である。しかし、実際には物思いにふける時間などない。一度じっくりいろいろなことを考えてみたいのだが、結局日常生活に振り回されている。

最後に、冬。今はまだ初冬だが、これから福島の平地にも雪が舞い降り、本格的な冬がやってくる。冬は寒くて嫌だという人もいるが、私は好きである。もともと寒さは苦にならないほうである。なにしろ、我が家にはストーブというものがなかった。暖房機器といえば、こたつだけである。食事のときの台所の寒さといったらかななかのものである。今思うと、よく我慢できたなあと思う。当然自分の部屋には、暖房機器など全くない。まさに氷点下の世界である。

中学3年生の冬に受験勉強のためにと、親にねだり「足温器」なるものを買ってもらった。今でも売っているのだろうか。まさしく足だけを温めるものである。寝袋を半分にちょん切ったような形状である。「足温器」に足を入れたいがために、机に向かった覚えがある。しかし、30分もすると気持ち良くなり眠ってしまったことも何度かあった。この「足温器」には高校3年生までお世話になった。まさに、冬の“必需品”だったわけである。

ここで断っておくが、我が家がストーブを買えないほど貧しかったわけではない。父親が、火事の危険性があるからと、なるべく火の気のあるものを家の中に置かなかったのである。それは、今でも変わっていない。『字のないはがき』に出てくる向田邦子の父親ほどではないが、とにかく厳格な父親であった。

そんな父親に、ずっと反発していた。いつも一触即発だった。いつ頃からだろうか。素直に話せるようになったのは。結婚してからだろうか。そんな父親を含め両親をどこかに連れて行ってやりたいなどと考え、車を買うときにわざわざ8人乗りの車にした。おかげでだいぶ高くついてしまった。これには、実は落ちがある。知らなかったことだが、父親は車酔いをするのである。自分で運転しているときはいいのだが、人の車に乗ると酔ってしまうのである。そんなこんなで父親は私の車に乗らずじまいであった。

ところで、あの「足温器」はどこに行ってしまったのだろうか。あの母親のことだから、物置の二階にちゃんとしまっていることだろう。もう一度「足温器」を使いたいと言えば、すぐに探して持ってきてくれるにちがいない。そんな母親である。「足温器」にもう一度足を突っ込んでみたいという懐かしさと、二度と見たくもないという気持ちと半々でなんとも複雑な思いである。中学時代の冬、まさしく「足温器」の冬である。今年はどうな冬になるのだろうか。